

ちかこ青春ノート

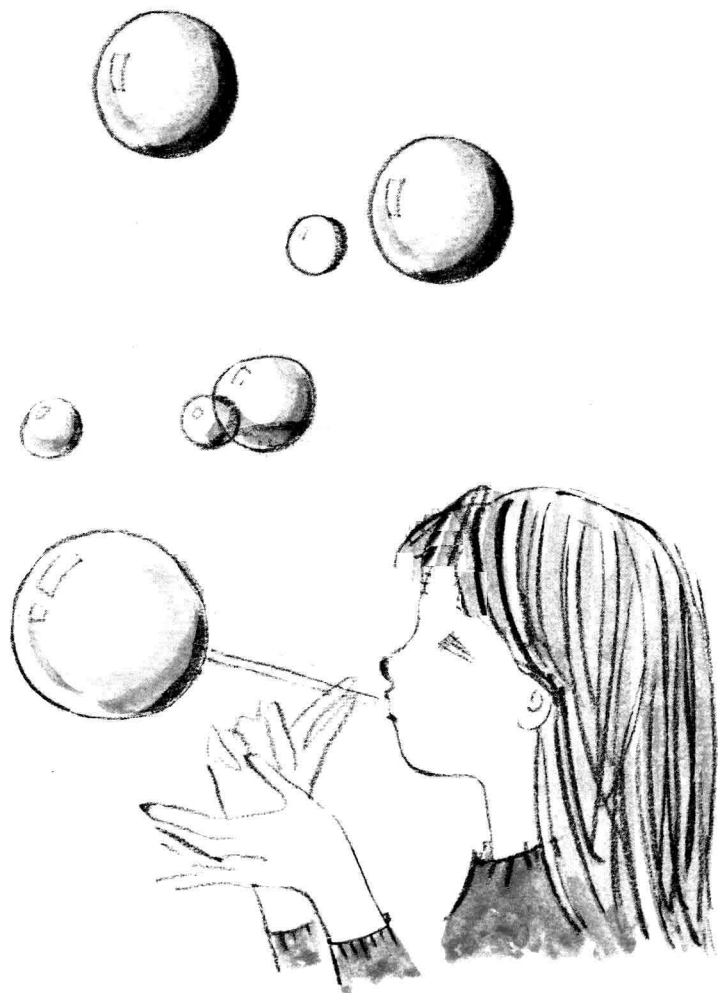
愛について—あなたと

みつはしちかこ

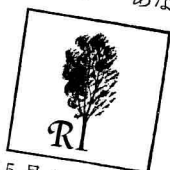
ちかこ青春ノート

愛について—あなたと

みつはしちかこ



愛について——あなたと



1974年5月1日 第1刷発行

¥ 400

愛について——あなたと

著 者 みつはしちかこ

発行者 下野 博

発行所 株式会社立風書房

〒 141 東京都品川区東五反田 3 の 6 の 18

電 話 (03)447-1191

振 替 東京74493番

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

株式会社美術版画社

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

0093-9726-8909

愛について——あなたと・目次

第一章——思い出星たち 5

思い出星たち 6

いちらしい夢のおはなし 8

桜吹雪とS先生 12

父の悪癖 18

青春の道草 21

うれしい手紙 25

愛の花束 33

第二章——おかしなおしゃべり 39

おかしなおしゃべり 40

ありがとうの一言 42

遅刻中毒 45

ピーターパンのように 48

ワコとグル 53

電車の中のまんが 67

タクシーはダメ!! 73

かき文字の楽しさ 75

真夜中のミルクティ 79

女の遊び 81

胴長おじさんのこと 89

男友たち 99

第三章——美しい人たち 103

美しい人たち 104

弱点の魅力 106

花の季節 109

ひとりひとりの美しさ 112

美女の弱点 116

美人不美人 125

第四章——たったひとつのことを 145

たったひとつのことを 146

はじめての心 148

魅力ある話し方 152

人に迷惑をかけないで生きられるか？ 156

赤の時代 159

恥からの出発 165

おくりもののところ 169

恋の入り口 175

コッソリ小さい旅に出よう!! 179

第五章

えんぴつの詩

197

えんぴつの詩

198

目覚めたら

200

春は毎日

202

雨の訪れ

204

バラ色の宝

206

ちり紙交換

208

しらなかった……

210

ある恋の昇天

212

歩く

214

あとがき

216

ブックデザイン——野呂昌子
イラスト——みつはしちかこ

第一章 思い出星たち



思ひ出さうもらは

ふんたふんたに

母のよう

いつもわたしの背後に

居てくれるわたしに

「いっふいふに」とチチヤキける

いつも
どきどきに
おどろくことも
あったことある
にせよ



いぢらしい夢のおはなし

幼いころから、高校を卒業するころまで、私はいつも（精神的にではなく）飢えていた。ひもじい思いをしていた。

はるかな記憶であるが、小学校低学年のころ、小さなグミの実が赤くなるのを待てずに、取っては食べ、玄関先のツツジの花さえもむしって食べた。隣の家芝生の垣根にはびこっていたカタバミの実も——。とても酸っぱかった——。

給食のコッペパンは、大事に大事に、中からほじくって食べ、焦色こげいろのついた皮を、薄く舟型に残して、それはいちばん最後にちびりちびりと食べた。今では想像もできないようなことだけど……。だから、たまに病氣にかかると、うれしかった。いつもはちっともかまってくれない母が、オカユを作ってくれたり、リンゴをむいてくれたり——そして、何よりも楽しみだったのは、くず湯。母の作ってくれるくず湯は、他の何にたとえようもなく、おいしかった。

透明で、ゆらゆらしていて、熱あつくて、ほのかに甘い……。お匙さきでひと匙ひと匙、



ゆっくりとすくいとって食べてゆくうちに、だんだんとぬるくなってきて……いくらお茶碗のふちをくまなくかきとつても、もうなんにもついてこないようになってしまった時の寂しさと、懐かしさ……。私はしばらく、なんにもついてないお匙を、アメ玉のように口にくわえて、消えていったほのかな甘みを追いかけるのだった。

だから今でも、空のスプーンを舐めてみると、ほのかに甘い感じがする。

とにかく、私はくず湯が大好きで、一カ月もくず湯を食べないと、もうたまらなくなってきた、病気になるってしまう。といっても、本当の病気ではない。くず湯恋しさに、仮病をつかうのである。

まず、朝、寢床でぐずぐずしている。

「早く起きなさい」

とどなられると、

「頭が痛い……」

と訴える。すると母は、心配げと、怪しげと、半分ずつの顔をして近づいて来て、私のオデコに手をあててみる。

「……別に熱はないようだけど、ま、とにかく、計ってみてごらん」

と、体温計をよこす。朝は母も忙しいから、そのまま台所へ行ってしまう。

さて!! 私はモソモソと布団の奥深くもぐり込み、脇にはさんだ体温計を、シュッ

シュツと摩擦^{＊さう}させるのである。すると、体温計の水銀はグングン上がる。どうやってこのことを発見したのかは忘れたけど、なにしろ、シュツシュツと前後に動かしてれば、摩擦熱で簡単に上がってしまう。

うっかりすると、上がり過ぎてしまう。三十九度にもなると、医者と呼ばれ、注射なぞされてしまうから大変だ。

だいたい、三十七度五分くらいに調整する。これは、用心しないと、夕方熱が上がるかもしれない微妙な体温であるからして、

「今日は学校お休みなさい」

と言われるし、

「食べたいものを食べて、ぐっすり眠ればすぐよくなるわ」

と言われる絶好の体温なのである。

私は枕元に、みかんやりんごを少し手をつけただけで置いておき（みせびらかし）、兄妹たちの羨^{うらや}ましげな視線を感じつつ、上品に眠っているのである。

しかし、仮病の時は、とてもお腹が空^{うろ}いたなあ……。なんでも食べたいものを食べられるだけ食べなさい、なんて夢のようなことを言われても、私はなにしろ、病気の身である。ここぞとばかりガツガツ食べたらいっぺんで化けの皮がはがれるではないか。



くず湯を食べ終わったお茶碗を舐めてしまいたいのを我慢している辛さ。

なぜか、くず湯は、病気の時しか食べさせてもらえなかった。

私はくず湯のあとのお匙を舐めながら、「いつか、きっと……私が学校を卒業して働きに出て、自分でお金を稼ぐようになったら、まず、くず湯をお鍋一杯作って、思う存分食べよう」と——それが私の幼いころの、いちらしい夢であった。

高校を卒業して勤めるようになると、会社の昼休みや帰りに、友だちとプリン・アラモード、ソフトみつ豆、チョコレートサンデーやフルーツパフェ等を追いかけまわし、もうすっかり、透き通った熱いくず湯のことは忘れてしまっていた。

結婚して会社を辞め、家に居るようになって徒然なるまきに、ある日、フト……そうだった!! 私は、かのいちらしい夢を思い出したのである。——くず湯をお鍋一杯食べること。

私はさっそく、片栗粉の大袋を買って来て、お鍋一杯のくず湯を作ったのだった。しかし、いくら食べてみても、食べてみても、あのうっとりするようなおいしさは、決して帰ってこないのだった。

こうして私の夢は、アツケなく実現され、ゴミバケツの中へ、ほとんど捨てられるハメになったのである。

桜吹雪とS先生

残念なことに、私は学校時代ほんとうに我が師と仰ぐ先生を持つことができなかった。

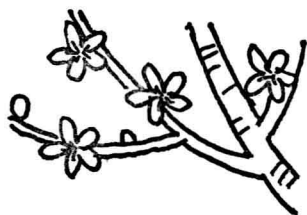
第一私はあまりいい生徒ではなかったから。

成績はいつも中の下くらいだったし、これといった得意な課目があったわけなし、背丈も高からず低からず、指名されたこともほとんどなく、授業中、ノートのすみにまんがを描いたり、居眠りをしたりして過ごした。

先生なシにかわいがられたら大変だと思う一方、友だち同士のように親しくしている先生と生徒をみるとムラムラし、特定の生徒にばかり指名する先生を、教室のすみっこからにらみつけたりしていた。

中学の時、窓ぎわの席で、私のひじが窓ガラスにちょっとぶつかって、どうしたところか他愛もなくガラスがはずれて庭に落ち、割れてしまった。

私はすぐに後始末をして、担任の先生のところへ詫びにいったのだが、その時、先生



はジロリと私を見下ろし、

「あしたガラス代を持って来なさい」

と言ったのだった。

ガラスが落ちた時よりも、私はこの先生の冷たい言葉を聞いた時のほうがハッとしました。

当時、百円もなかったガラス代だったが、私は帰る道々、父にどう言っこのガラス代をもらおうか、思いあぐねていた。

——私がこれといたいたずらをしていてガラスをこわしたわけじゃない……。

——あんなに、ほんのちよつと、音もしないくらいにひじがあたっただけで、ストーンと落ちてしまった窓ガラス……。

私はなんと恨めしく思ったことだろう。いや、それよりも、からかうような目つきで「ガラス代を持って来なさい」と言った先生の憎らしさ。ああ!! 私はあの先生に嫌われているんだ。

案の定、父にどやしつけられて、やっとこさガラス代をもらった私は、翌朝、さっそく職員室へ直行した。

するとどうだろう、かの先生はチラと私の差し出したお金を見て「なんだい、これは?」といった不思議そうな目をむけた。

私が言いかけようとする、やっと、先生は気がついて、

「ああそうか」

と言って、そのお金をポケットに押し込んだ。私は昨日よりもっとこの教師を憎みながら職員室を出た。

その先生は背もスラリと高く、ハンサムで女生徒たちの間では絶大な人気があった。が、以後、私はハンサムな先生はすべてひと目で嫌うようになった。

この先生を筆頭として、私にとって、先生は皆、嫌な冷たい存在であった。が、なかで一人、直接に親しくはしなかったけれど、親しくなりたかった先生がいる。

それは中学二年の時の担任で、よりによって、私が一番苦手とする数学の先生だった。

数学といえ、たいてい女の子が苦手とする学課で、とりわけそのS先生は、女だろうがなんだろうが情容赦なさけようしやのない先生で、びしびし立たせて、できない子はいつも放課後残して教え、赤点をつけないかわりに何回も追試をした。

私は、もちろん常に立たされ組、居残り組、追試組であった。しかし、私は、数学はいくら教えられてもサッパリ分らないのだ。先天的にそちらの脳が故障しているのではないだろうか？

S先生は嫌われものの数学の教師のうえ、容貌もコオロギみたいな顔つきで、服装